



安心とつるおの「下町」の手をめぐりて

# 防災 まちづくり 瓦版

発行ノ寺言問を防災のまちにする会

平成7年9月1日

## 工事説明会



開かれる

一言会の高田製薬跡地利用の計画も、実施の段階にはいりました。

7月7日には、墨田区の地域整備課と施設計画課によって、また、8月10日には工事を実施する施工業者によって、近隣にお住まいの方を対象にした説明会が開かれました。

区の実施した説明会では、一言会が2回の住民説明会を経てまとめた計画内容の確認と、工事概要の説明が行われました。参加された近隣の方からは、工事に関する質問のほかに、完成後の利用者のマナーに対する不安の声が聞かれました。施工業者による説明会では、工事工程等の説明が行われました。この場では、4tトラックが狭い道路を資材等の搬入搬出路として利用することから、他車両の交通の妨げになることも予想されるため、ガードマン等の誘導員を配置してほしいとの意見がだされました。

工事工程表 (工期 平成7年7月31日~平成8年3月29日)

	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
準備 工事	—							
仮設 工事		—						
基礎 工事		—						
躯体 工事			—					
屋根 工事				—				
防水 工事				—				
サッシ工事				—				
金物 工事				—				
外装 工事					—			
内装 工事					—			
その他						—		
外構 工事							—	



待たれる完成

工事着工。この一寺言問地区のみんなの建物がすこしずつ姿をあらわしてはじめてい。

## 下町を舞台にしたまちづくりの映画完成

瓦版 No. 34で紹介した向島とオッテンゼン(ドイツ)という2つの下町を舞台にしたドキュメンタリー映画ができました。1年がかりで撮影の行われたこの映画の題名は、『ふれあうまち 向島・オッテンゼン物語』。近く曳舟文化センターでの上映も予定されているそうです。

監督の熊谷さんから向島のみなさんへひとこと。

「お世話になりました。」

とにかく見てね。」



~上映会~

10月26日 午後7時より  
曳舟文化センターにて

向島出身のエッセイスト枝川公一さんと、監督の熊谷博子さんのトークもあるそう。

### □工事車両について

工事車両は、2t車及び4t車を使用。搬入搬出路は、水戸街道からのびる一寺小の東を通る道路を利用し、高田製薬跡地までを往復。

### □作業時間について

日曜・祭日は原則として作業は行わない。作業時間は、通学時間を除く午前8時から日没まで。

# 私がまちづくりスタッフです

その34  
向島五丁目  
山本賢太郎さん  
(一言会 副会長)



向島五丁目東町会の町会長になられた山本さんは、昭和5年生れ、出身は秋田県男鹿市。六人兄弟の長男で、中学に入るため秋田市に出て下宿、明治大学に入り上京する。

当時は、現在のように豊かな時代ではなかったので、子供の頃からよく働いた。小学校三年生の時には、水汲みのアルバイトをした。大学時代はありとあらゆる仕事をして学資を稼いだ。そういう学生を応援する暖かい雰囲気、世の中にあった。家庭教師が忙しくなり、卒業後、両国で学習塾を開く。故、五井省吾都議の経営する塾の講師に招かれたのが縁となり、久子さんと結婚して、向島の住人となる。

一言会の副会長になって「住民主体のまちづくりのむずかしさを考えた時、十年にわたる一言会の活動は評価されるものがある。これからも、自由闊達な発想、ものづくりへのこだわりを大切にしながら、まちづくりを進めてゆきたい。」と考えている。

地元では「賢太郎さん」と呼ばれ、顔や髪の色つやもよく大変若々しい。都議で4歳といえば、まだ中堅のイメージだが、家に帰ると、マスコミのモデルになって、路地裏の手押しポンプを押す剛健君のやさしいおじいちゃんになる。

いちごことい  
一言言問/防災まちづくり瓦版  
第37号 平成7年9月1日発行  
編集/一言言問を防災のまちにする会・編集局  
高原純子・若木菊枝・植竹モト  
阿部洋一・明間 藤・中村淑子  
編集協力/マヌ都市建築研究所  
発行/一言言問を防災のまちにする会・事務局  
墨田区まちづくり事業推進部地域整備課内  
〒130 墨田区吾妻橋1-23-20 Tel.(5608)6261

被災地では時間の経過とともに、応急仮設住宅や復興まちづくりの問題など、新たな問題が浮上してきています。4月中旬頃までの3ヶ月近くも長い間、水道やガスが復旧しなかった所もありました。現在でも一万余千人の人々が、公園などで避難生活を送っているといわれています。応急仮設住宅での高齢者の孤独死や疲れ果てた被災者の自殺なども頻発し、最新の集計によると震災関連の犠牲者は六千人を越えたと言われています。復興まちづくりについても、住民の意向をまとめるための協議は始められたばかりです。再び元の場所に家を建てて、自分のまちに帰れるようになるまでは数年間かかるようです。

しかしそんな状況の中で、多くの人は「被災地の人は元気だ」といいます。「多くをなくしたことで、何が大切なか、何のために生きているのかを知って、一段と強くなつたのではないでしょう」と言っている人もいます。被災地の人々は、苦しい被災生活の中で「住民自らが自分たちの手で新たなより良いまちをつくらう」と、今後のまちの復興を夢見てたくましく頑張っているのです。

① 焼け跡に建てられたテントの共同仮設店舗「復興元気村」  
(5月26日 神戸市長田区)



② 応急仮設住宅の家並み  
(4月7日 神戸大甲アイランド)



③ 跡地に建物の基礎壁が残る焼け跡の跡地  
新しいまちがつけられる日を行っている  
(5月15日 神戸市長田区)

私たちも「阪神・淡路大震災」を他人事として忘れてしまわずに、これからも震災から教訓を学び、自ら家庭やまちの防災について、真剣に考えていかなければならないと思います。そして、被災地の人々の復興に向けた情熱を見習って、災害に強いまちづくりに向けて、より一層積極的に取り組んでいかなければならないと思います。



「よみがえれ!! 神戸」  
一日も早い復興を目指して  
おはしゃぎ始めている  
(5月15日 神戸三宮センター街)

忘れたい・忘れられない・忘れてはいけない  
「阪神・淡路大震災」のその後

今僕が、11月17日に発生した「阪神・淡路大震災」から、半年以上が経過しました。「もう過去のこと」「関西で起きた遠くの話」として、忘れてかけてはいませんか? その後「地下鉄サリン事件」が発生したため、東京の新聞やテレビでは「阪神・淡路大震災」をとりあげる機会がめっきり少なくなっていました。が、「阪神・淡路大震災」は今も続いています。



神戸の中心街・三宮では  
被災したビルが次々と解体されいく(5月26日)

倒壊した建物の解体作業や焼け跡の瓦礫の撤去作業などが進められ、さび地が目立ちます。このさび地は、これから新しいまちをつくるための希望の土地です。少しずつではありますが、いよいよ震災からの復興にむかって動き始めています。

被災地では時間の経過とともに、応急仮設住宅や復興まちづくりの問題など、新たな問題が浮上してきています。4月中旬頃までの3ヶ月近くも長い間、水道やガスが復旧しなかった所もありました。現在でも一万余千人の人々が、公園などで避難生活を送っているといわれています。応急仮設住宅での高齢者の孤独死や疲れ果てた被災者の自殺なども頻発し、最新の集計によると震災関連の犠牲者は六千人を越えたと言われています。復興まちづくりについても、住民の意向をまとめるための協議は始められたばかりです。再び元の場所に家を建てて、自分のまちに帰れるようになるまでは数年間かかるようです。

